

説教「インマヌエルの預言」

イザヤ書 7章 10～21 節（口語訳聖書）

1976.12.12

待降節礼拝

日本バプテスト同盟 関東学院教会

紀元前 734 年、北部同盟軍の進撃を目前にして動揺していたユダの王アハズに対し、預言者イザヤは、気をつけて静かにし、神の聖なる導きに目を注ぐようにと、神の言葉を伝えました。そして、もしあなたが信じないならば、立つことはできない、存続することはできないであろうと言いました。アハズはこのイザヤの言葉に聞こうとはしなかったようであります。迫りくる敵軍の脅威を前にして、それどころではないといった心境でしょうか。しかしイザヤは、アハズ王が耳を貸そうとしなかったということで断念はしません。再び、アハズ王の前に現われたのであります。ユダの国の置かれた状況がもし勝ち目のある戦いに出てゆくものであったら、この神の託宣にアハズは喜んで聞き従ったことでしょう。それは易^{やさ}しいことでもあります。ところが、今は敵の大軍によって包囲され、城が落ちれば王位を奪われることがはっきりしている。この政治的な危機のただ中で、静かにして神に頼れという言葉はどうしても受け入れられなかったのであります。

人間は、常識的判断に立つならば、こういう時に手をこまねいて神のみ手を仰ぎ望むということは、とてもじゃないけれどできない相談だということになりましょう。しかし、こういう状況に立ち至ったとき、まさにそういう時にこそ、神の言葉がイザヤに臨み、神への信仰が求められたのであります。アハズの反応はなかった。しかし、イザヤは引き下がらなかつたのです。今度は場所を変え、おそらく 2～3 日の後^{のち}に再び、神の言葉がイザヤに臨みました。イザヤは王の前に現われ、神の言葉を告げました。この重大な局面に当たって、神の助けを確信しうるためのしるしを神に求めなさい！ と。神のお告げの言葉だけでは信じられないなら、しるしを求めなさい。それを見ることによってでもよいから、信じなさいと言う。陰府^{よみ}のような暗黒の深みでも、天のように高い所においてでも、すなわち人間が想像しうる世界の果てにしるしを求めようと、どこに置かれていようともそれはかまわない。要は、神に求め、しるしを願ってみなさい。神は、私たちがどんな場所、どんな状況に置かれていようとも、もし神に願うならば、神はそこに手を差し伸べていてくださる。イザヤを通し、神はこれほどまでにためらっているアハズ王に迫って、神に求め願ってみなさいと言われるのですが、アハズ王は依然として、それをしようとしないのであります。

おそらく、イザヤを動かしている見えざる神に委ねるといことは空^{そら}恐ろしいことで、一度そこ

に踏み込んだら戻れないことになりはしないかと、その不安のほうが先立ったのかもしれませんが。体の良い返事をして、神の勧めを避けてしまいました。しかも、^{いつけん} 一見、^{けいけん} 敬虔な者の口の利き方をしています。しるしを求めて、主を試みることはしません。本来の言葉の意味は、「神様は、しるしを見せてくれなければ信じません。神様がはたして私についていてくれるかどうか、しるしで判断しよう」という そういった不信仰な気持ちから神を試みることを言うのですが、しかしアハズの場合は、しるしを求めてもよいから 神の助けを確信するように、と語っています。ですから、私は主を試みることはしませんという答えは、明らかに逃げ口上にすぎなかったのです。おそらくアハズは、にべもなく断って イザヤを怒らせまいと考えたのでしょう。アハズ王の心はもう、アッシリアに助けを求めるために、たとえどんな値を払ってでもやろうと心に決めていたのであります。

イザヤはアハズの心底を見抜いたのであります。そして、「そのように、折角の神からの恵み深い申し出を何遍でも断り続けて、人を煩わすだけでなく、神をも煩わそうとするのか。こんなにまでイザヤを通じて決断の機会を提供しているのに、どうしてもそれに手を伸ばそうとしない。いつまで、イザヤと神に忍耐せよというのか」とそう言ってから、14 節において ^{おごそ} 厳かな神の託宣を告げるのであります。「それゆえ、主はみずから 一つのしるしをあなたがたに与えられる。見よ、おとめがみごもって 男の子を産む。その名はインマヌエルとなえられる」と。つまり、アハズに対して「求めよ」と言っても求めようとしなかったので、今度は、神様自身がアハズとその王家に対してしるしを与えようというのです。そのしるしというのは、間もなく一人の男の子が生まれるということであり、インマヌエルと命名されるということでありました。「それゆえ」で、このお告げは始まっています。アハズ王は、神の導きと助けを確信しうるしるしを求めようとしなかった。それゆえ、与えられるインマヌエルのしるしは神の裁きを示すものとして与えられたのであります。その名をインマヌエルという。すなわち、「神 われらと共にいます」ということを示す名です。

この名を持つ男の子の誕生がアハズ王とその王家にとってどんな意味を有するのかを考えてみましょう。13節の イザヤによる神のお告げが「ダビデの家よ、聞け！」で始まっていることに注目したいと思います。アハズ王に対する神の言葉は単に王の個人的な事柄ではなく、王の挙動は一国の運命に関わることであります。インマヌエル、「神が共にいます」という言葉は、ユダの国の王に対して 神の守りと祝福の言葉が語られるなかで出てまいります。ダビデが王位にあったとき、預言者ナタンが神のお告げをした言葉の中に、「神が羊飼いの ^{まきば} 牧場からあなたを選んで イスラエルの君とし、どこへ行ってもあなたと共にいて、名を大きくする。その国の位を固くする」といった約束が与えられています（サムエル記 下 7：8～9）。また、ダビデ自身に示されたという神のお告げには、「人を正しく治める者、神を恐れて治める者は、太陽や雨のように人に恵みを注ぐ。まことに、わが家（王家）はそのように、神と共にあるではないか」（同 23：1～7）とあります。さらに、詩篇 89 篇20節以下では、「わたしはわがしもべダビデを得て、これにわが聖なる油をそそいだ。わが手は常に彼と共にあり、・・・わがまことと、わがいつくしみは彼と共にあり、わが名によって彼の ^{つの} 角は高くあげられる。・・・彼はわたしにむかい『あなたはわが父、わが神、わが救の岩』と呼ぶであらう

う。わたしはまた 彼をわがういごとし、地の王たちのうちの最も高い者とする」とも言われています。こうした一連の言葉はダビデ家の王位にある者に対する言葉で、特に即位の式に臨んで与えられる神の保証の言葉、約束の言葉であります。

このように、生まれる男の子にインマヌエルという名が付けられるというしるしは、本来ならば、ダビデ王家に対する神の約束と保証を与えるものでありました。もし アハズ王が直面する政治危機に当たって神への信頼と忠誠を示したなら、このインマヌエルの約束はアハズのものとなり、ユダ国のものとなったはずでした。しかし、アハズは再三にわたる 神の言葉やしるしを求めよとの要請にもかかわらず、神への不信をもって神の導きのみ手を拒んだので、このインマヌエルのしるしはもはや 救いのしるしではなく、裁きのしるしとなったのであります。そのことが 15～16 節に記されています。その男の子が、食事に対して「これは食べる」「あれは食べない」といった意志を示すくらい年、すなわち 3 歳くらいのときに凝乳^{ぎょうにゅう}と蜂蜜^{はちみつ}とを食べる。ちなみに、冒頭で言った北部の 2 つの国の同盟軍は滅ぼされる。アハズはあれほどおののいて、預言の忠告も聞かずに 大国アッシリアに頼みの手を求めたが、恐れたその敵は数年して結局 滅んでしまうといひます。

男の子が食べるこの 2 種の食べ物が何を意味するのか 確かではありませんが、元来、この食物は遊牧民にとっては理想郷を意味しました。乳と蜜の流れる国と言って、^{あらの}荒野のイスラエルの民が待ち望んだ国であります。本来、そんな素晴らしいパラダイスの食物であるはずののですが、しかし 21～22 節を見ますと、^あ荒れ^{すた}廃れた土地にわずかに生き残った者たちがその生活を支えるための食べ物となっています。雌牛^{めうし}1 頭と羊 2 頭を飼って、その乳によって生活するとあるのは、一家族をどうにか養える程度ということです。つまり、今から数年の^{のち}後には、王家の人々は何も作物のとれない荒れ地で わずかな家畜によってかろうじて生活する身となるであろう、というのです。

どうしてそうなるのかというと、神を捨て、助けを求めて 大国アッシリアに走ったからだといひます。18～19 節を見ますと、そこで神は、皮肉にも そのアッシリアの蜂を呼ばれる。すると、その蜂がイスラエルの地に群がりやってくる。そのようにして、彼らはアッシリアから甘い蜜を期待したところが、当のその国の蜂が群がり飛んできて、人々は蜜の代わりに 蜂に刺されて痛い目に^あ遭う、と風刺的に告げています。アッシリアにより頼んだためにかえって とんだ苦痛を受けることになり、その甘い期待が見事に裏切られて、全くの幻滅となる。とんだ災い^{こうむ}を被る結果となるであろう、というのです。

ともあれ、インマヌエルのしるしが、すなわち 本来「あなたと共にいる」という恵み深い神の約束であったものが裁きのしるしとしてここに与えられたということ、それは一体 どうしてなのでしょう。それは、インマヌエルにおいて神が差し出されたこの恵みの約束に対し、差し出されたその人がどういう態度をとるかによって、それが救いともなれば 裁きともなるということでもあります。神はアハズに再三 選択の機会を与え、しかも、どちらでも好きなほうをとるがよいと言ったのではありません。しるしを求めて、それを見せられてからでもよい。そのしるしを見て、神の導きを確認

し、それで神のみ手に委ねなさいと、そのほうを勧められたのです。しかし、アハズはそれを拒みました。神はアハズに選択の余地を残し、強制はなさりませんでした。結果は、彼の責任となります。

神は、人間が自分から進んで、神が良きものとして差し出しているものを受け取ることを願っておられるのであります。それをしないで、神ならざるこの世の権力や富や欲に走るならば、その期待がどんなに虚しく、幻滅であるかを、ユダの国の歴史が教えています。神はすべての民に良きものを与え、救いを与えようと望んでおられる。しかし、人間の目が暗く、それが分からず、神の贈り物を拒否し、無視し、軽蔑して顧みないがゆえに、世は闇の中に災いと不幸を重ねております。

しかしながら、闇の中に、そのただ中に、インマヌエルの名を負うまことの神のみどりごが世に
きた
来り給いました。それは、マタイの1章21節に「彼女は男の子を産むであろう。その名をイエスと名づけなさい。彼は、おのれの民をそのもろもろの罪から救う者となる」とあるとおりです。これは預言の成就です。アハズのようにではなく、預言者イザヤのような信仰をもって、この方をお迎えしたいものだと思います。否、まさに、この暗き罪を取り除くために生まれてくださったお方を。

イザヤ書 7章 14 節「見よ、おとめがみごもって 男の子を産む。その名はインマヌエルとなえられる」